

## 第13回日本SPF豚研究会 講演要旨

### 1. 今からでもやろう環境対策

(独)畜産草地研究所 羽賀清典

家畜排泄物の管理の適正化と利用の促進に関する法律の期限が迫っています。養豚経営の将来の発展のために、環境対策は必須のものです。ふん尿処理に王道はありません。養豚の主要なふん尿処理方法は堆肥化(発酵施設)と汚水処理(浄化槽)です。両方とも確立された理論のある技術です。

施設にただカネをかければいいものでもありません。色々な種類の発酵施設と浄化槽がありますから、自分の経営に調和したやり方を選びましょう。すでに環境対策が十分にすんで自信のある方、かなり対策が進んでいるがちょっと不安のある方、様子をみながら対策を始めた方、まだ何もしていない方、色々だと思えます。将来の発展のために、今からでもやろう、環境対策です。

### 2. 新しいSPF豚農場認定基準について

SPF豚農場認定基準再検討委員会 委員長 柏崎 守

SPF豚協会では、農場認定基準の策定以来10年がたち、基準の一部に現状にそぐわない事項がみられることなどから、昨年から現行基準の見直し作業を行っている。見直し作業は、生産ベンチマ・クヤヘルスチェックにおける測定・診断・評価基準について重点的に検討しており、本年6月までに新しい基準を提案する予定である。改訂方向は、GGP・GP農場における検定対象疾病の拡大、CM農場における生産効率の評価法改定、安全性確保の強化、飼育プロセスの記録・保存などが盛り込まれる予定である。

### 3. 豚舎の洗浄・消毒と農場への病原体持ち込み防止対策について

(独)家畜改良センター茨城牧場 筒井真理子

養豚場における疾病蔓延の予防や、病原体侵入阻止の観点から、豚舎の洗浄・消毒や、持ち込み物品の消毒措置は極めて重要性の高い作業である。しかしながら、豚を飼養している状態で、豚舎を完全に水洗・消毒し、その消毒効果を判定することは、現実的には困難である。我々は、先年、システム切り替えのために牧場から豚をオールアウトするという機会を得た。その際、既存豚舎や付帯施設の洗浄・消毒を、菌検査による効果確認と併行して行った。また、さまざまな対策を講じて、サルモネラ菌汚染豚舎の清浄化を行った。

我々が選択した新システムは、基本的には日本SPF豚協会の方式に準じているが、公的機関としての機能を果たすために、疾病侵入の危険性が否定できない業務を行わなければならない状況にある。これらの業務に伴う疾病の侵入を防ぐため、いくつかの病原体持ち込み防止対策を講じてきている。本研究会において、これらについての概要をご報告したい。

### 4. 豚肉生産における消費者ニーズへの対応

静岡県中小家畜試験場 堀内 篤

近年の豚肉に関する消費者ニーズは高品質化・多様化している。このようなニーズに応えるためには、種豚の育種改良、飼育管理技術の改善とともに消費者への供給方法が重要となっている。先ず育種改良においては、おいしい赤肉の効率的生産が目標となるが、赤肉量の選抜には不良肉質遺伝子の排除が前提となる。また、テーブルミートに求められる形質、たとえば筋肉中の脂肪含量(霜降り肉)などの遺伝率は比較的高く、高品質肉を生産するための種豚改良は有効であり、積極的な取組が必要である。そして、その豚の持つ遺伝的能力を最大限に発揮できる環境で健康な豚を飼育することは言うまでもない。

さらに、消費者に安心して安全な豚肉を購入してもらうために、生産現場の状況を明らかにし、生産に関する情報提供の必要性が認識されてきた。

しかし、豚肉の流過程の管理についてはどうだろうか? 試みに、市販豚肉の核酸関連物質から推察すると、様々な履歴を持つと思われる豚肉が流通していた。したがって、生産から流通・消費に至る適切な管理と情報提供により、消費者の望む「安心・安全で高品質な豚肉」の提供が可能となるものと思われる。